

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区築地二の十二の五松竹会館  
電話 三五四二一五四七一番

清元協会

世田谷区桜ヶ丘四ノ九ノ十八  
電話 三七〇六一九五二七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館  
電話 三五七一〇二一六番

新内協会

新宿区大久保二の二三の二  
電話 三二〇〇一四六五三番

常磐津協会

港区南青山五ノ十三ノ三  
電話 三四〇七四七四三番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四  
電話 三五四二一六五四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二ノ十五ノ十二ノ四〇三  
電話 三五八五一九六一六番  
(五十音順)

後援 東京都

平成九年三月八日(土)

朝日生命ホール

第一部 正午開演  
第二部 午後四時開演

三時半終演  
七時半終演

'97 都民芸術フェスティバル

第二十七回 邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

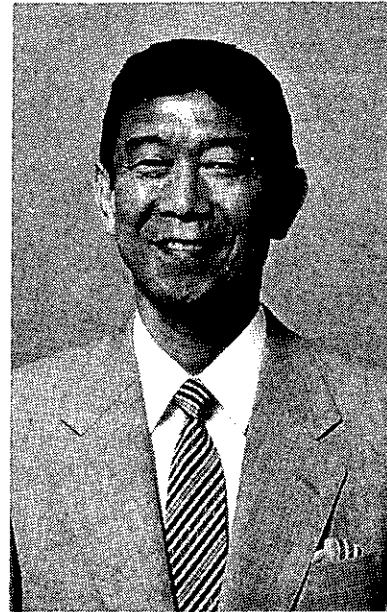


'97都民芸術フェスティバル公演計画一覧

分野	種目	演 目	期 日・会 場	入 場 料 金	問 い 合 せ 先	
音	オペラ	マスカーニ作曲「カヴァレリア・スチカーナ」 レオンカヴァルロ作曲「パリアッチ」 (二期会オペラ振興会)	2/9・2/10・2/11 東京文化会館大ホール	13,000～2,000円	(財)二期会オペラ振興会 ☎3796-4711	
		ヴェルディ作曲「マクベス」 (藤原歌劇団)	2/19・2/21・2/23 東京文化会館大ホール	20,000～2,000円	(財)日本オペラ振興会 ☎5466-3185	
		歌舞劇「花盛羅馬恋達引」 —ポッペアの戴冠— (モンテヴェルディ作曲)— (東京室内歌劇団)	3/1・3/2 東急文化村シアターコクーン	15,000～6,000円	東京室内歌劇場 ☎3431-7875	
楽	オーケストラ	オーケストラ・シリーズ No.28	1/23・1/31・2/12・2/16 2/24・3/2・3/14・3/20・3/31 東京芸術劇場	3,500～1,500円 セット券 28,000円 (A席150席限定)	(社)日本演奏連盟 ☎3437-6837	
	ポピュラー	永遠のラテン名曲集	3/5 よみうりホール	2,500円	(社)日本音楽家協会 ☎3585-3903	
		シャンソンハイライト'97	3/6 よみうりホール			
		スタンダードをあなたに～ジャズ～	3/7 よみうりホール			
邦楽	第27回邦楽演奏会	3/8 新宿朝日生命ホール	2,000円	日本三曲協会 ☎3585-9916		
演	現代演劇	松下竜一作 「魔子とルイズ」	3/14～3/25 俳優座劇場	5,000円	(社)日本劇団協議会 ☎3341-8151	
劇	児童・青少年演劇	「おちこぼれ行進曲!!」 原作 小山内美江子「19才」より	3/20～3/30 多摩社会教育会館他7会場	〈前売〉3,500円 〈当日〉4,000円 無料招待あり	日本児童・青少年演劇団協議会 ☎5376-3671	
舞	バレエ	「白鳥の湖」	1/30・1/31・2/1 東京文化会館大ホール	10,000～2,000円 無料招待あり	(社)日本バレエ協会 ☎3499-5525	
		「四大バレエ団競演」Aプログラム (レ・シルフィード、薬は色あせて) ライモンダ第3幕、ポレロ	3/13・3/14 東京文化会館大ホール	8,000～2,000円	東京バレエ協議会 ☎3725-8000	
		「四大バレエ団競演」Bプログラム (春の祭典、バンダ・レイ) ペルソナ、KATUO NI SILAGA	3/15・3/16 東京文化会館大ホール			
	現代舞踊	「サマンサの鼻」 「そんな夢を見た」 「世紀末の憂鬱」	1/18・1/19 東京文化会館大ホール	4,000～2,000円 無料招待あり	(社)現代舞踊協会 ☎3400-4544	
日本舞踊	第40回日本舞踊協会公演	2/12・2/13・2/14 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	(社)日本舞踊協会 ☎3533-6455		
古典芸能	能	能および狂言	都民能3番 式能10番	1/18 国立能楽堂 2/16 国立能楽堂	3,000円 6,000円	(社)能楽協会 ☎3574-6441
		民俗芸能	第28回 東京都民俗芸能大会	3/8・3/9 東京芸術劇場中ホール	無料招待	東京都民俗芸能大会実行委員会事務局 ☎5978-3651
	寄席芸能	第27回 都民寄席	2/8～3/12 八王子市民会館他8会場	無料招待	都民寄席実行委員会事務局 ☎3833-8622	
4分野	12種目	76公演	22会場			

○これらの個々の公演の詳細に関するお問い合わせは、各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたる問い合わせは、東京都教育庁生涯学習部文化課(電話 ダイヤルイン 5320-6861)へお願いします。

'97 都民芸術フェスティバルによせて



東京都知事 青島幸男

今年もまた、ファンの皆さんが心待ちにしている「都民芸術フェスティバル」のシーズンとなりました。  
この催しは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へをキャッチフリーズに、東京都が芸術文化団体の公演を助成することにより、

より多くの都民の皆さんに最高の舞台芸術を鑑賞していただけるよう実施しているものです。  
皆さんの熱いご支持と舞台を創られる方々の意欲的な取組に支えられ、東京の初春を飾る多彩な文化行事としてすっきり定着し、今回で29回目を迎えることができました。

今や芸術文化は、私たちの生活を真に豊かなものとする上で欠くことのできない、いわば生活の必需品です。また、都内において芸術文化活動が盛んに繰り広げられることは、東京の活力や創造力を示すものと言えましょう。

東京都では、今後とも、都民の皆さんが芸術文化を身近で楽しむことができるよう、文化事業の充実、発展に努めてまいります。

この「都民芸術フェスティバル」に一入でも多くの皆さんが参加され、優れた舞台芸術に接し、心ゆくまで楽しんでいただければと思います。

おわりに、フェスティバルにご参加いただいた邦楽連合会の皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、公演のご成功と今後ますますのご活躍を期待いたします。

第一部 番組 (正午開演)

一、三曲梓

尺同同三 箏  
八 絃  
作川福野野  
田村田坂坂  
鵠操操操 惠  
盟紫紅 寿子

二、義太夫 義經 千本桜 | 鮎屋の段 |

浄瑠璃 竹本越道  
三味線 鶴澤友路

三、一中節 都若衆 万歳

浄瑠璃 宇治紫文  
同 宇治文美子  
同 宇治紫仙  
三味線 宇治文蝶  
同 宇治文好  
同 宇治紫行

四、長唄鷺

娘

同	同	唄
今	東音	今
藤	渡	藤
政	辺	長
貴	雅	之
	宏	
同	同	三
		味
		線
今	今	今
藤	藤	藤
政	美	政
十	治	太
郎	郎	郎

五、新内節日

高

川

飛込み

浄瑠璃	鶴	賀	須	磨	寿	々
三味線	富士	松	菊	三	郎	
上調子	富士	松	菊	次	郎	

六、清元梅柳中宵月(十六夜)

同	同	同	浄瑠璃	清	元	延	勇	輝
同	同	同	清	元	延	初	磨	
同	同	同	清	元	延	明	寿	
同	同	同	清	元	延	清	恵	
			三	味	線	清	元	延
			上	調	子	清	元	延
			清	元	延	古	摩	寿
			清	元	延	古	摩	寿
			清	元	延	古	摩	寿

七、常磐津花舞台霞の猿曳(うつば)

同	同	同	浄瑠璃	常	磐	津	勘	寿	太	夫
同	同	同	常	磐	津	清	若	太	夫	
同	同	同	常	磐	津	松	重	太	夫	
同	同	同	常	磐	津	若	音	太	夫	
			三	味	線	常	磐	津	八	百
			同	同	同	常	磐	津	八	百
			上	調	子	岸	澤	式	松	
			常	磐	津	常	磐	津	八	百
			常	磐	津	常	磐	津	八	百
			常	磐	津	常	磐	津	八	百

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、尺八鹿の遠音

尺八川瀬順輔  
同 川瀬庸輔

二、河東節 常陸帯花の柵

浄瑠璃 山彦ちか子  
同 山彦幸子  
同 山彦香子  
三味線 山彦東子  
同 山彦とも子  
上調子 山彦のぶ子

三、清元 深山桜及兼樹振 (保名)

浄瑠璃 清元 美寿太夫  
同 清元 荣志太夫  
同 清元 幸寿太夫  
同 清元 志貴太夫  
三味線 清元 荣三  
同 清元 美治郎  
上調子 清元 荣吉

四、義太夫 恋女房染分手綱 | 重の井子別れの段 |

重の井竹本 駒之助  
三吉竹本 綾一  
三味線 鶴澤 津賀寿



曲目解説（演奏順）

（解説 竹内道敬）

第一部

一、三曲 粹すま

三下り端歌物の地唄作品。作詞・作曲者未詳。一説に尾州某作詞・作曲とも、藤井勾当作曲ともい  
う。歌本などから見ると、寛政（一七八九—一八〇一）以前の作品と推定される。

歌詞は謡曲の「葵上」をもとにしやれて遊女の世界を述べたもの。はじめは「三つの車に法の道…」  
と、謡曲から引用した有名な文句で、途中の「鉄杖振り上げ、丁、丁、丁」のあとの合の手で、手事  
風にうわなり打ちを表現している。一部に踊り歌ふうの歌詞があり、またよく知られた歌の文句など  
があつて、謡曲を直接に借りた山田流箏曲や地歌の「葵の上」とはちがったおもむきがある。

早くから京都の河原崎検枚の手付けと伝えられる箏の手を合わせた演奏が行われており、また上方  
舞の地としてもよく上演される。

二、義太夫 義経 千本 桜——鯨屋の段——

延享四年（一七四七）十一月、大阪竹本座で竹本島太夫、竹本此太夫らで初演。二世竹田出雲、三  
好松洛、並木千柳の合作。「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」とともに人形浄瑠璃全盛期の傑作。  
没落した平家の三武将知盛、維盛、教経を中心に、いがみの権太と狐忠信の挿話を脚色したもの。

権太の人情味を見せる三段目「鯨屋」は、維盛を配して変化がある。勘当同様になっている吉野下  
市の鯨屋の息子権太は、母親から三貫目の銀子を出させ、鯨の空桶に隠す。父の弥左衛門は、前の場  
面で死んだ主馬の小金吾の首を、別の鯨桶の中に隠す。平重盛の恩顧を受けた弥左衛門は、重盛の子  
維盛を弥助と呼んでかくまっている（ここから）。その弥助に思いを寄せた娘のお里と祝言させること  
になるが、はからずも尋ねてきた若葉の内侍のことを聞いて悲嘆にくれる（今日の演奏はここまで）。  
このあと弥左衛門は維盛親子を逃がし、権太はその後を追って行き、さらに物語は続く。

三、一中節 都若衆 万歳

原拠は元禄十五年（一七〇二）初演の竹本筑後掾の「富貴曾我」。その最後の場「けいせいいくよ万  
歳」の遊女の名寄せを、若衆方の名に書き替えたもの。初世都一中の作曲で、当時の人気俳優の名前

が並べられているから、ずいぶん喜ばれたものであろう。

もとの内容は、関東一の舞の上手曾我五郎の娘皐月の前が、十郎の息子祐時を相手に法楽の舞を舞う場面。このあと十郎と五郎の霊が荒神としてあらわれ、国土を護らんと光り輝くというめでたい場になる。万歳、柱建て、船尽し、馬揃えで、すべてめでたい尽し。一中節のおさらい会（演奏会）では馬揃えを「お馬」と称して出演者一同で語る習慣がある。

#### 四、長唄鷺娘

宝暦十二年（一七六二）四月、江戸市村座で二世瀬川菊之丞の踊った五変化舞踊「柳雛諸鳥囀」の一として初演。作詞者未詳。富士田吉治・杵屋忠次郎作曲。

雪の降りしきる水辺に、傘をさした白無垢姿の娘があらわれる。白鷺にも似たその姿は可憐で、どこか凄艶でもある。娘は恋の恨みを思い出し、町娘らしく流行り唄を踊り、やがて傘尽しの踊りとなり、恋ゆえに落ちた地獄の呵責の責めになり、苦しむありさまをみせる。明治二十五年に九代目市川団十郎が復活上演してから、派手な引き抜きなどの新演出で大流行の作品となった。

#### 五、新内節 日高川——飛込み——

鶴賀若狭掾作詞作曲。成立年代未詳。

原拠は寛保二年（一七四二）初演の義太夫節「道成寺現在蛇鱗」の四段目「清姫嫉妬の段」の道行景事。ただしこれを脚色した宝暦九年（一七五九）初演の「日高川入相花王」の題名を借りて「日高川」とする。

光仁帝の他戸皇子と山部皇子の後継者争いに、道成寺伝説を加えた物語の一部。他戸皇子の道ならぬ恋を避けて流浪中の清姫が、嫉妬のため蛇体となり、道成寺まで追いかけて行き、安珍を殺す夢を見る。上下に分けて、上は「嫉妬の段」、下がこの「飛込み」。日高川を渡さぬという船長の言葉を聞いて、清姫は蛇体となり、道成寺まで泳いで行く。筋は分かりやすいが、節の変化の多い曲なので、喜ばれている。

#### 六、清元梅柳中宵月（十六夜）

安政六年（一八五九）二月、江戸市村座の「小袖曾我薊色縫」一番目の所作事浄瑠璃として初演された。二世河竹新七（のち黙阿弥）作詞、清元徳兵衛作曲。一説に清元お葉、二世延寿太夫の妻作曲。鎌倉極楽寺の所化（見習い僧）清心は、大磯の遊女十六夜と馴染みを重ねたが、女犯の罪に問われ、さらに祀堂金の使い込みも追求されて、寺を追放になる。稲瀬川まで来たところ、廓を抜けてきた十



六夜と出逢う。十六夜は連れて逃げてくれと頼むが、清心は京へ上って修行をしたいからと断る。それを聞いた十六夜が川へ身を投げて死のうとするので、問いつめてみると、清心の子を宿しているというので、二人はこれまでと、川へ飛び込むまで。このあと清心は泳ぎを知っていたので死に切れず、十六夜は川下で悪人に助けられるが、清元は身投げまで。

芝居の初めに心中の場が設定されていたこと、「忍ぶなら」の当時流行の端唄を入れたこと、クドキが二つあること、男が所化なのでクドキが仏教に関係することなどが特色としてあげられる。

### 七、常磐津 花舞台霞の猿曳（うつつぼ）

中村重助作詞、五世岸澤式佐作曲。天保九年（一八三八）十一月、江戸市村座の顔見世狂言「白旗世界樹顔鏡」の四立目に初演された。狂言「鞆猿」を脚色した文化十二年（一八一五）初演の「寿鞆

猿」を、さらに改作したもの。大名と太郎冠者を女大名三芳野と奴橋平にしたのは、いかにも歌舞伎所作事らしい趣向である。

京都郊外鳴滝のあたり。主人更科主水経春の代参をすませた三芳野は、奴の橋平を狂言の太郎冠者に見立てて、伊勢道者の姿を写したおもしろい踊りを踊る（このくだりは今日は省略）。しかし三芳野には、鞆のための猿の皮を調達する役目があった。思案しているところへ小猿が出てくる。続いて猿曳が登場。ちようどよいと猿を所望するが、猿曳は明日から暮らせないと言って渡さない。三芳野が大名の威勢を見せて脅すので、しかたなく、猿曳は猿の一打ちという急所を打って殺すことを承知する。鞭を振りあげて殺そうとすると、小猿はいつもの通り船を漕ぐ芸をする。三芳野はそれを知って小猿の命を助けてやる。猿曳はお礼に祝言の舞を舞わせるといふ筋。

## 第二部

### 一、尺八鹿の遠音

尺八古典本曲。秋の深山に遠く聞こえる鹿の鳴き声の描写を曲想としていて、描写的な性格と音楽的な華やかさを備えている点で、「鶴の巢籠」と並んで古典本曲のなかでは例外的な存在である。

一管だけで演奏することもあるが、たいてい今日のように二管の掛合で演奏される。雌雄の鹿の呼び合うさまともいうが、美しい旋律が多く含まれている。

### 二、河東節 常陸帯花の柵

作詞作曲者未詳。一説に溝口侯より下されたといい、寛政三年（一七九一）成立という。

謡曲「桜川」を脚色したもの。貧乏を見かねて身を売ったわが子を尋ねて、その母が筑紫からはるばると常陸の国桜川（桜の名所）まで尋ねて来る。そこで里の子供たちから、おもしろく花を掬えば教えてやろうといわれ、掬うところから、歌いながらわが子恋しやと掬ううち、子供を連れた僧があらわれ、めでたく対面となる。長唄「賤機」（別項）や清元「隅田川」と同じ趣向だが、こちらはめでたく対面するのが特色である。

### 三、清元 深山桜及兼樹振（保名）

文化十五年（文政元年——一八一八）三月、江戸都座で三世尾上菊五郎が踊った七変化舞踊「深山桜及兼樹振」の一「小袖物狂い」として初演。篠田金治作詞、清沢万吉（のち初代斎兵衛）作曲。

原拠は義太夫節「芦屋道満大内鑑」の二段目道行「小袖物狂の段」。天文の博士加茂保憲は、門人安倍保名に秘伝書を与え、養女の榊の前の婿にしようとしていたが、果たせぬままに死ぬ。保憲の後家は秘伝書を芦屋道満に与えようと企み、榊の前が失くしたと罪を着せて隠してしまう。そのため榊の前は自害し、彼女を愛していた保名は、その小袖（着物）を抱いて狂いさまよう。吉原のことが出て

くるのは、初演当時の慣習。

数少ない男性の狂乱もののひとつ。大正十一年に六代目尾上菊五郎が新演出で上演してから、人気曲となった。ごく初期の清元作品だが、名作として歓迎されている。

#### 四、義太夫 恋女房染分手綱——重の井子別れの段——

宝暦元年（一七五一）二月大阪竹本座で、竹本土佐太夫、竹本大隅掾らにより初演。吉田冠子・三好松洛の合作。近松門左衛門の「丹波与作待夜の小室節」を改作したのだが、あらたに由留木家のお家騒動を加えて筋を複雑にしている。十段目の「道中双六」「重の井子別れ」が名高く、とくに後者は歌舞伎化されて人気狂言になっている。

由留木家の御物頭伊達の与作は、若殿の恋人芸子いろはの身請金三百両を盗まれ、さらに腰元重の井との不義があらわれたため勘当される。与作は馬方となって三百両の調達に苦心するうち、関の小まん（もと芸子のいろは）と恋仲になる。与作と重の井の間の子は、自然生の三吉と名のつて馬子になっているが、与作はわが子と知らない。由留木家の息女調姫の乳人となっている重の井は、姫が東国へ下る時、いやがる姫に道中双六をして承知させた三吉と対面するが、役目のために母子の名のりをせず、そのまま別れる。

#### 五、新内節 明烏夢の泡雪——雪責め——

初代鶴賀若狭掾作詞作曲。安永元年（一七七二）ごろ成立か。「蘭蝶」「伊太八」と並ぶ三大名作のひとつ。実説によったものだが、宮園節「夕霧由縁の月見」の影響が大きいと思われる。

春日屋の時次郎は、山名屋の浦里と馴染みを重ね、借金で首が回らなくなり、死のうと思ひ、浦里の部屋に入り浸り、隠れていたが、遣手のかやに見つけられ、浦里は亭主に引き出され、時次郎は若い衆に表へたき出されてしまう（ここまでが通称「浦里部屋」）。雪の降る山名屋の中庭で浦里とむろのみどりは古木に縛られ、亭主に折檻される。隣家の二階からは三下りのめりやす「昨日の花は今日の夢」が聞こえてくる。浦里のクドキがききどころ。やがて屋根伝いに時次郎が助けにきて、三人いっしょに塀を飛び越えた、と思つたのは夢であつたというのは、心中ものや事実に基づく物語が禁止されていた当時の事情による。

#### 六、常磐津 恋鼓調懸罨（女夫狐）

この曲の成立はちよつと複雑である。まず天明六年（一七八六）十一月江戸中村座で富本「袖振雪吉野拾遺」が初演された。これは『太平記』の世界に吉野の狐伝承をからませたもの。それを天保十一年（一八四〇）九月に江戸市村座で常磐津「吉野山雪振事」として再演した。それをさらに「義経

千本桜」の世界に作り替えたのが本曲で、四世岸澤古式部が幕末のころに作曲したものらしい。大和吉野山の奥に、卿の君と閑居している源義経のところへ、忠信を供に連れられた静御前が訪ねてきて、一同の所望によって「しずやしず」の舞を舞う。初音の鼓を忠信が打とうとすると、侍女たちが壇の浦の合戦の様子を物語るように勧めるので、戦物語になる。卿の君が二人を怪しみ、鼓を打ちながら正体をあらわせとせまる。二人は鼓の革にされた狐の子で、夫婦の狐であると打ち明ける。それを聞いた義経は二人を憐れみ、鼓を与えるまで。

### 七、長唄 八重霞賤機帯(賤機)

文政十一年(一八二八)六月、江戸山王祭の山車の行列の附祭として初演された。杵屋三郎助(のち十代目六左衛門)作詞作曲。原拠は宝暦元年(一七五一)初演の一中節「峰雲賤機帯」。人買いに息子をかどわかされた女が、狂女となって都から東へ下り、隅田川の岸辺にたどりつく。船長は退屈しにぎに狂女をからかうが、狂女は子の行方を教えてくれという。船長はなおも、持っている網でおもしろく花を掬えば教えてやろうとなぶる。狂女が掬いはじめると船長は同情して声をかけるが、狂女は羯鼓を打ちながら舞い続ける。賤機とは正しくは倭文機と書き、古代の織物の一種だが、その模様が入り組んでいるところから、心の乱れたさまにたとえられた。賤としたのは「桜川」(別項)で貧乏を見かねて身を売った話にちなんだもの。

## 御礼 邦楽連合会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございました。何かと不行届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいませますよう、お願いを申し上げます。

今までには、このように邦楽をまとめて鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一所懸命でございます。これからも、邦楽に変わらぬ御支援を賜りますよう、重ねてお願いを申し上げます。

今年の二十六回まで、ずっと同じ料金でやって参りましたが、今年からはやむをえず、値上げをさせて頂いていただきました。まことに心苦しい次第ですが、どうかご了承のほどを伏してお願ひ申し上げます。

来年もここ新宿朝日生命ホールで、三月七日(土)に開催する予定でございます。番組がきまり次第にご案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいませますよう、お願い申し上げます。また、今日お聞き下さいましたご感想やご意見などもお寄せ下さいませ。よりよい邦楽のためにご指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。

ありがとうございました。